
【 異世界トリップ（仮題） 】 ボーイズラブ

行之泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「 異世界トリップ（仮題） 」 ボーイズラブ

【Nコード】

N5897Y

【作者名】

行之泉

【あらすじ】

四回で終る予定の短編集になる予定です。
異世界トリップを扱ったボーイズラブ作品です。
軽く読める短編小説を目指します。

約束 その1

晴天に恵まれた秋の日。

雲ひとつない爽やかな朝だった。

住宅街の辺り一面に甘い芳香が漂っていた。

金木犀の香りだ。

僕、屋久ツカネ（おくひさ つかね）は、大きなため息をついた。

大好きな香りなのにも関わらず、今日ばかりはこの香りを嗅ぎたくなかった。

二日酔いで頭がガンガンする。

…昨日は飲みすぎた。

ちよつとした振動にも響く頭を抱え後悔しながら、大学への向かっていった。

こんな時に一限目から授業だ。

大学のサークルの単なる飲み会だった。

最初は明るくみんなと合わせて飲んだ。

だけど、途中から止まらなくなった。

飲み会の前に嫌なことがあったのだ。

忘れようとして殊更はしゃいだのが悪かったのか、考えないようにはすれはするほど、あの時にことが思い出された。

昨日、付き合っていた恋人に振られた。

「俺はお前の王子様じゃない」

苦しそうな顔で彼から別れを告げられた。

突然の出来事だった。

鷺色の瞳が魅力的な一学年上の男性だった。

交際は順調に進んでいるはずだった。

第一印象で好きになったのは確かだ。
いわゆる一目惚れ。

そこに過去に出会った人の面影を重ねていたのも事実。
でも僕自身は忘れようとしていた。

僕が王子様と呼ぶあの人のことを…

…でも。

…やっぱり忘れられてなかったんだ。

過去に忘れられない人がいることは話していた。

それが王子様だということも。

曖昧な説明をしたから、元恋人は単なる比喻だと思って言ったの
だろう。

けど、むかし僕が王子様に出会ったのは事実だ。

まだ中学生の頃。

お互いひと目で恋に落ちた。

僅かの間、幸福な時間を過ごした。

だけど、大きな問題を前に別れてしまった。

もう逢えないし、あれは幻影を見ていたようなものと理解して
いるけれど。

沈痛な面持ちで地面を見る。

本当はこのまま学校に行かなきゃならないけれど、回れ右をして
家に帰りたくなる。

独り暮らしのアパートへと。

その時、僕の周囲が暗くなった。

さっきまで雲ひとつ無かったのに、突然現れたのだろうか。

不思議に思い顔を上げる。

夢を見ているのかと思った。

広い空の上を銀色の翼をつけた馬が走っている。

馬の上には若い男性が乗っていた。

僕の記憶の中にだけ存在している人。

…僕の王子様。

彼を凝視していると視線に気がついたのか、馬はツカネの方へ駆けてきた。

「何を見ているのだ。愛しい我が君」

記憶の中にしか存在しなかった彼が僕に笑いかけた。

「約束しただろう。迎えに来ると」

約束 その1 (後書き)

今回は最初から四回連載のつもりで
試行錯誤中。

約束 その2

「……ディムナ」

僕は呆然として彼の名前を呼んだ。

「どうした。そんな驚いた顔をして」

不思議そうな顔をしてディムナは首を傾げた。

黄金の髪が艶やかに輝き、まるで天使が光りの輪を戴いているようだ。

白い肌は透き通っていて、まず日本人ではないと判る。鼻筋の通った端正な顔。

懐かしさで涙が出てきそうだった。

彼を見ると、別れた元彼がいかに似ていなかったのか判る。

横顔にその片鱗が見えるだけだ。彼とはまったく違う。

鳶色の瞳は別れ際の彼の瞳の色。

この世界を動けるよう、己の存在をこの世界に馴染ませるための術の余波で変化したものだ。

その瞳が本来は灰色がかった紫色をしているのを僕は知っている。元の姿ではない証。

眩しい笑顔を見てみると、押さえていた思いが溢れそうになる。

抱きつきたい衝動を抑えた。

どうして彼がこの場にいるのか、それを正さなければならぬ。

彼と僕は生きている世界が違う。

現実社会では起こりえない、翼の生えた馬が飛んでいるという事を見ても判る。

「迎えに来た？僕に会いに来ただけではないのですか」
ふと。過去の思い出が蘇ってくる。

出会いは偶然だった。

夏休み、道端で迷子になった小さな子供を拾った。
泣き止まない子供を自宅に連れ帰り一緒に遊んだ。
夜に兄と称するディムナが現れた。

彼をひとめ見た時、僕は恋に落ちた。

彼等は妖精で女王と人間の混血だと紹介された。

父の生まれた世界を見学に来て、弟が逸れ迷子になったらいい。

僕が心の中で「僕の王子様」と呼んでいるのは、そのせいだ。

妖精の世界では女王の息子である王子は沢山いるのだが、僕にとつての王子様はディムナだけだ。

彼は迷子の弟を保護してくれたお礼を僕に言った。

その後、弟が僕に懐いているのを見て、一週間面倒を見てくれな
いかと提案したのだった。

夏休みだったし、何より一目惚れした彼と離れたくなかった。

彼の提案に乗って僕は妖精の世界へ行き、夢のような一週間を過
ごしたのちに帰ってきた。

帰宅して僕を待っていたのは、やつれ果てた祖母の姿だった。

両親を幼い頃に亡くし祖母と二人暮らしだった僕は、祖母に旅行
をすうと云って家を出ていた。

一週間くらいと言って家を出た僕が帰宅したのは一年後。

妖精の世界での一週間は、現実の世界では一年だったのだ。

祖母は何も聞かず、帰宅した僕を喜んでくれた。

だけど、それ以降は祖母が病で亡くなるまで、僕は旅行を禁じら
れた。

中学を一年行かなかった僕は、もう一度同じ学年を通うことにな
ったのだけど、修学旅行ですら欠席させられた。

今でも僕は、祖母には悪いことをしたと思っている。

あの祖母の姿を見て、僕は未練たっぷりだった恋に終止符を打っ

た。そして今がある。

「ツカネは言ったではないか。別れたくないと。私もそう思った。だからまた会おうと約束しただろう」

「あれは…違います。このまま別れるのは寂しいと言っただけで…ディムナは、僕に会いにもう一度この世界に来ると約束してくれただけで…」

あの時の約束。忘れるはずはない。

妖精は約束を違えることが出来ない存在だ。

だから彼が僕に愛の告白をして恋人として過ごしても、終りは見えていた。

離れたくなかったけど、離れた。

それが本心だ。

言葉は僕の方が正しい。

だけど心情で言えばディムナの言った通りだ。

一週間しか居なかったのに、僕達は沢山話をした。帰りたくなかった。

でも僕を育ててくれた祖母の事を思うと、帰ってきて良かったと思う。

複雑な思いが僕の中で渦巻く。

戸惑うばかりの僕を見て、彼は表情を曇らせた。

「もしかして、嫌だったのか」

「そんな事はないよ。また逢えて嬉しい」

「ならばもう一度向こう側に来てくれないか。弟が寂しがっている。ツカネに会いたいと言って泣くんのだ。困った兄を助けてくれないか。不自由はさせない。もう一度、一週間でいいんだ。弟の子守りをしてくれないか」

コチラの世界では一年が経過するということだ。

行方不明で一年。

せっかく第一志望の大学に入学したというのに…

心の中、現実と感情の天秤が揺れ動く。

「それは…」

「私の我がままだったようだ…」

ハッキリしない僕を見て、ディムナは失望を顔に浮べた。切ない表情。

僕の胸が軋むように痛んだ。

「待って！」

胸が苦しくて切なくて、僕は思うまま感じるままに口を開いた。

「僕。行きます。向こう側に連れて行って。ディムナ」

約束 その2（後書き）

第一話からずいぶん時間が経ってしまいました。

すみません。反省。妖精の世界だと瞬きをする間でしょうけれど（笑）

さて。短編にあまり時間をかけてもしょうがないので、この話は次回で一区切りつけたいなと思ってます。

こんどは目標の「序破急」展開で行けそう。

最終回は現在鋭意制作中。明日か明後日には更新します。

約束 最終回

僕の言葉を聞いて。ディムナは顔を輝かせた。
馬の上から手を伸ばす。

僕が彼の手を取る。

と、次の瞬間には騎乗していた。
目の前には馬の太い首が見える。
そして僕の背中を包み込む存在。
胸が奇妙なリズムを取り始める。
僕が移動したのは、彼の力だ。

思ったように思った場所に、自分や承諾した者を異動させることが出来る。

「私の望みを叶えてくれてありがとう」
背後から嬉しそうな声が聞える。
僕も嬉しい。

またディムナと過ごせるなんて。
夢のようだ。

そう思ったけど口に出せない。
言ったが最後、自分の世界に戻りたくなくなりそうで怖かった。
「さて。出発するよ」

手綱を剝くと、馬が前足を上げる。
馬が足を着いた時、僕は同じような馬の集団が前方を行進していることに気がついた。

周囲を見回す。

見知った風景が揺れている。

まるで水の中から外を見ているようだ。
もうここは既に妖精が干渉する世界だ。

厳密には僕の居た世界の隣くらいの位置関係らしい。
空間の狭間を闊歩している。

妖精の騎士達が習慣にしている、騎馬行列の中に僕達がいるのに
気がついた。

馬上に乗っているのは、勇ましい騎士達。

ふと、騎士の一人が後ろを振り返った。

骨格の全てが頑丈に出来ていて、顔もそれと同じように無骨を現
したような男性。

その顔には見覚えがある。

彼の乗った馬が隊を離れて、近づいてきた。

「副長。何処に行つてたんですか」

からかう色を隠さず男性はディムナに言った。

「迷子になったんじゃないかって、みんなで話をしたところで…
…」

言いかけて、ツカネに気がつく。視線が納得の色を帯びる。

「ああ。成る程……ツカネ。久しぶりだな」

「お久しぶりです。レーヴ」

「また、あの珍しいニギリメシが食べれるのか。楽しみにしている
ぞ」

僕が挨拶を返すと豪胆な騎士レーヴはにこやかに笑った。

妖精の世界では男性は基本的に騎士や職人の仕事をする事が多い
のだけど、僕は子守の仕事だったから、必然的に女性の仕事を手伝
っていた。

食事は僕も作った。材料は僕がイメージしたものを妖精に伝える
と、どこから調達したのか判らないけれど、欲しい商品そのものを
用意してくれた。

簡単な料理しか出来ないけど、珍しいご馳走として捉えられてい
たみたいだ。

普通はパンや豆もスープが主だから、確かに違っただろう。

手で持って食べられるのも、馬で移動の多い騎士達に好評だったと聞いた。

厳密に世界の構造がどうなっているのかは判らない。

だけど判っているのは、彼らが人間の持つ情報を元に生活しているということ。

話を聞くと、元々はスコットランドやアイルランド辺りと繋がっていたらしい。

スコットランド人やアイルランド人と関係の深い妖精が多いからだ。

ディムナの父親がスコットランドに渡った日本人だった。

ディムナは自分を創った人の情報を元に、人の世界を見に来て、日本を訪れ、僕と出会った。

そして再び僕を訪ねてきてくれた。

でも疑問がひとつある。

一体どうやって僕を探したのだろう。

別れ際に交わした言葉は約束には届かないはずだ。

でも来てくれて嬉しい。

それだけは確かだった。

二度目の訪問で僕は生活に戸惑うことなく、妖精の世界に馴染んでいた。

大きな樹木を繰り抜いた屋敷にみんなで住んでいる。僕も小さな部屋をひとつもらった。

でもディムナの幼い弟の世話があるから、部屋に帰るのは寝る時だけだった。

出会った時10歳くらいに見えた彼は今も同じくらいの年齢だ。それはそうだろう。

僕の時間で6年経ったという事は、この世界では6週間くらい。そんなに変わらなくてもおかしくない。

一人っ子の僕は兄弟を知らない。

だから弟が出来たみたい嬉しかった。

そして、今も…

毎日、楽しく遊び過ごした。

そして僕にこっそり教えてくれた。

「あのね。ディムナ兄様。ツカネが居なくなってから寂しそうだったよ」

「そうなんだ」

「僕も淋しかったよ。ねえ、ツカネ。僕達とここでずっと楽しく暮らそうよ」

「そう言われても、僕は妖精にはなれないでしょう。向こう側の人間だし…」

口に出してから、僕は自分が何にこだわっていたのか気がついた。この世界の妖精じゃないことに引け目を感じていたんだ。

「そんな事ない。ツカネは妖精の国の食べ物物を口にしたんだから、もうこの世界の住人なんだよ」

「え？何だって」

「もうこの世界の住人だって言ったの。だから、術を使って返さないようにする事も出来たのに、兄様はツカネの気持ちが大切だって言っつて元の世界に帰したんだ」

「僕の気持ちが大切」

「ツカネのこと兄様すぐ見つけたでしょ。それはツカネがこの世界の住人だってことだよ」

自信満々に言われて僕は驚いた。

確かに、この国で出される食事はみんな食べた。

中にはキラキラ光るパンとか、不思議な食べ物もあったけど…それよりもディムナの僕に対する想いの深さを知って、それを言わない彼の優しさに気づいて。

僕は前よりも、もっともっとディムナを好きになっていた。

ディムナとは彼の仕事が終わった夜、弟をねかしつけた後に逢瀬を重ねた。

手を繋いで話をするだけ。

だけど、それだけでドキドキして心臓が破裂しそうだった。

でも手を離すなんて考えもしない。

このままずっと、ずっと一緒にいたい。

思いが深く激しくなっていく。

日々を重ねると、この世界が僕にとって本当の世界になっていく。以前は怖いと思ったけど、今はそれを望んでいる。

それは予感に終らず、確信になっていった。

現実の世界で大切な人は祖母だけだった。祖母が自分を現実に繋いでいた。

その絆が無くなった今、次に大切なのは目の前のディムナだ。

幼かった恋が今時を経て、愛情へと変化している。

思いを伝えよう。僕は決意した。

明日は約束の一週間だ。

僕は自分の思いをディムナに伝えようと思っていた。

そう思っていたら、ディムナが緊張した面持ちで先に言葉をぶつけてきた。

「向こうの世界に大切な人がいるのか？」

唐突な質問に面食らう。

「そんな人いないよ」

あっさりと答えると、ディムナは安堵の表情を浮かべ、僕の足元に膝をついた。

顔を上げると僕を眩しそうに見つめる。

「私の求愛を受けてくれないだろうか。ずっとこの世界で一緒にいて欲しい」

僕の返事は決まっている。

自分に出来る最高の笑顔を作ろうとして…失敗した。

抑えていた思いが溢れて、両目から流れ出す。

急に泣き出した僕を見て、ディムナは慌てて立ち上がった。

「ツカネ。どうしたんだ一体。私は無茶を言ったのだろうか。やっぱり向こう側に帰りたいかった？」

盛大な誤解をはじめたディムナに向って、僕は大きく首を横に振った。

「違う。ちがうよ。僕…嬉しくて。嬉しいんだ」

泣き笑いの顔で僕が言っていると、ディムナははじめ信じられないような顔をして…徐々に眩しい笑顔に変る。

「良かった」

ホッとした声と共に、頬を包まれる。

ディムナの顔が近づいたと思ったら、唇が重ねられた。

「約束してくれる？」

「うん。約束する。ずっと一緒に……」

僕の約束の言葉は、彼が再びくちづけた事で途切れた。深くなるくちづけの気配に、僕は瞳をそっと閉じた。

約束 最終回（後書き）

これでこの話は終りです。

ここまで読んで下さいましてありがとうございました。
途中に中断した期間があつて申し訳ありませんでした。

今回の話。

私にしては珍しく直球の物語だったような…気がします。
いつもBLを銘打つても話の中心が恋愛にならない事が多くて。
ボーイズっぽいかどうかは別として、恋愛メインテーマという事で
最低限の条件はクリアしたかと思ひ…たい。

……あ。

この世界の妖精の証。

手の指が四本という設定を作ったのに書き忘れてました。

（妖精には人間と違う欠落した部分があることになっていらしい）
本編の話にあまり関わらないので、これはこのままにします。

さて。

次は女性主人公の異世界トリップの小説を書こうと思います。

この場所で次の話を書くのは、次の次の予定です。

魔法と妖精を書いたから、次はどんな異世界がいいかな〜ワクワクW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897y/>

【 異世界トリップ（仮題） 】 ボーイズラブ

2011年11月26日23時46分発行